

第4回 誰でもわかるみんなの学校プロジェクトのモデル解説

～質のミニマムパッケージ～

この稿では、“みんなの学校にはいろいろなモデルがあるが、区別がつかないし、内容もわからない。”という声に答えるべく、みんなの学校のモデルを説明しています。興味のある方は是非一読ください。第4回目は、住民参加より質の改善を目指したモデル「質のミニマムパッケージ」の登場です。

前回のおさらい

現在のみんなの学校の活動計画方法は、教育の質を保証する要素を学習時間（生徒）、学習環境（教科書）、教授の質（教員）と規定し、要素毎に、それぞれの学校の状況を分析して、その学校で、教育の質を保証するのに欠けていたり、不足していたりするものを見つけ、不足や欠如の部分を補い、埋める活動を探していくものです。この計画策定方法をベースとして、住民の支援による活動と補助金による活動を組み合わせることにより、質の改善へのシナジーを目指したのが、前回のご説明した「学校補助金を有効に使い学習の質を改善するための計画方法」でした。補助金有効利用モデルの効果は JICA 研究所によるインパクト評価により科学的に証明されました。

質の改善計画モデル開発のきっかけ

確かにインパクト評価の結果は、賞賛されるべきものでしたが、学力の向上の度合いは、プロジェクトが期待するほどではありませんでした。もともと、算数やフランス語の実力がとても低い生徒が多いニジェールの教育現場です。もっと効率のいい方法がなければ、彼らの識字や計算能力を付けることはできません。そこでプロジェクトは「学習の質を改善するための計画方法」で活動を選択し、補助金を使って活動を実施しても、なぜ期待したほど成果がでないか、問題を分析しました。その結果、それまでのやり方では、質を規定する3つの要素、学習時間（生徒）、学習環境（教科書）、教授の質（教員）の内、学習時間と学習環境は改善できたものの、教授の質（教員の質）の改善が不十分だということがわかりました。教授の改善する方法と問えば、通常教員の質改善という答えが返ってきますし、カリキュラムや教科書の内容を改善しつつ、教員養成校の教授の質を改善するなどの方法で、教授の質を上げるというのが、ニジェールの教育開発計画の内容でもあります。正論です。しかし、現実には、教育省の改革の恩恵が隅々までいきわたり、ニジェールの学校の教授の質が改善できるのは、現在の計画の進捗から判断して、きつとずっと先のことです。つまり現在も将来も、ニジェールの小学校では、大多数の子どもたちが学校の入っても読み書き計算ができないまま学校を離れていくということなのです。プロジェクトでは、改めて、教授の質（教員の質）問題に向かい合わなければならないことになりました。この限界を超えることができるのか、ここから、みんなの学校の新しいモデル作りの挑戦が始まりました。

教員なしで、質の高い教育を実施する方法＝質のミニマムパッケージ

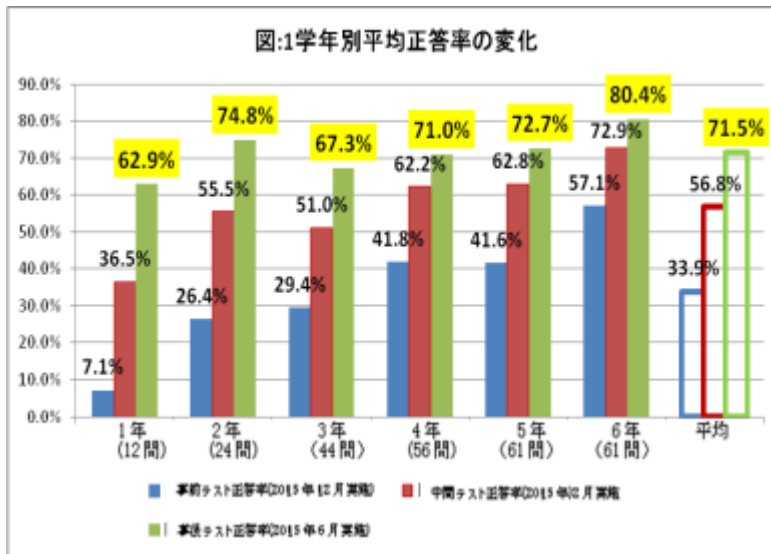
プロジェクトが挑戦したのは、「教員がいなくても、あるいは質の低い教員でも、質の高い教育を実現する方法」です。こんなことを書くと、そんなことができる訳がないみなさんに怒られそうですが、教え方を知らず、モチベーションも高くない教員が多いニジェールの教育現場を見ると、こういう方法でないと、落ちこぼれていく何十万という生徒に手を差し伸べることができないと思うようになりました。しかし、教育の質の改善が議論される時絶対にはずせないと考えられている教員という要素を回避して、生徒に直接アプローチし、本当にその学力

を上げることができるのか。

プロジェクトは答えを探しました。行きついた結果が、質のミニマムパッケージだったのです。このパッケージは、学力テストの実施とその結果の共有（学校の質に関する情報共有）、住民に支援された補習の実施（学習時間の増加）、順序だった反復による自得も可能な算数ドリルと補習ファシリテーターの導入（学習環境の改善及び、教授の質の改善）からなっています。つまり、それまでのみんなの学校モデルの弱点であった教授の質を、すぐれた自習教材とファシリテーターの研修の導入で、補い、質の改善のための3要素をカバーし、生徒に学力を付けてもらうことを狙いました。

驚異的な成果

このモデルの実証は、何回か行いましたが、最後に行った対象39校、4000人の生徒に対する試行では、下図の結果を出しました。四則計算にかかる学力テストにおいて、この質のミニ



マムパッケージ導入前の2014年12月から、中間時点の2015年2月、そして事後となる2015年6月では、全学年において大幅な正答率の上昇（全学年平均事前33.9%→事後71.5%）がみられました。特に、低学年（1、2年）における正答率は、1年生で7.1%から62.9%（55.8%上昇）、2年生で26.4%から74.8%（48.4%上昇）と驚くべき伸び率を示しました。この驚異的な改善は、一校あたり平均250時間に及び、算数ドリルを実施時間の確

保に支えられています。

この結果は、質のミニマムパッケージが、質を保証するための3要素を満たし「質の高くない教員で、質の高い教育を実施する方法」の一つの例を見事に示したと言えます。

モデル成功の理由

このモデルの成功には、2つの理由があります。一つ目は、学校の教授の質、生徒の学力を明らかにした学力テストの実施とその結果の保護者住民との共有です。保護者住民にとって、自分の子どもが行っている学校の質を知ることがとても難しいのが現実です。学校で行っている期末毎のテストは残念ながら、統一共通試験ではないので、学校のレベルも個々の生徒のレベルもわかりません。ニジェールには、客観的に生徒の学力を図る試験はありませんでした。この学力テストの実施とその結果の住民・保護者との共有により、初めて学校の実際の教育の質、つまり、学べていない生徒が大多数を占めることが明らかになったのです。この現実が明らかになったことで、それまで受験生が中心だった補習を低学年でも行わなければいけないこと、補習も効率的に行う必要があることがわかり、算数ドリルの導入とその実施が住民、保護者、教員などの学校関係者の自発的な誓約事項となったのです。

2番目の成功要因は、アフリカに合わせた優れた算数ドリルの開発です。日本には、すでに系

統的かつスモールステップで生徒が自習できるように作られた算数ドリルが存在していました。しかし、それらは日本の生徒向けに作られたので、アフリカの学校で学ぶ生徒たちの状況に合わせたものではありませんでした。プロジェクトでは、日本のリソースの協力を得てドリルを算数の基礎の基礎から作ってもらい、それをニジェールの生徒に実際に使ってもらいました。そうすると、日本の子どもにはわかって、ニジェールの児童にとってわかりにくいところ、特有の弱点などが明らかになりました。それらの点を日本側に伝えます。日本ではそれらの指摘をもとにドリルを改定するという作業を続けました。通算で2年間に及びこの気の遠くなるような作業を繰り返して完成したのが、現在の算数ドリルです。このドリルの効果は、その学力テストで、証明されることとなります。

汎用性はあるのか

素晴らしい効果を残している質のミニマムパッケージですが、モデルに汎用性はあるのでしょうか。いままでの項での普遍的モデルの定義は、「普遍的モデルは普遍的ニーズに対し、すでにその効果が証明されている原則を適用化した改善策をもつ」というものです。これに対しこのモデルは、どう評価すべきでしょうか。ニーズに関しては、学習の質を改善するというのは、教育におけるすべての関係者にとっての普遍的なものなので、定義に合っています。効果が証明されている原則の適用化についてはどうでしょう。パッケージの要素である学力の関係者との情報共有、補習による学習時間の増加の学力への効果はすでに証明されている原則で、プロジェクトはそれらの原則を現場にうまく適用しています。算数ドリルについても、類似自習ドリルによる効果は、広く日本で認められており、その適用の完成度は、実証の成果を見れば明らかです。この面でこのモデルに普遍性があると判断できると思います。

課題と挑戦

このモデルの普遍性について、プロジェクトは確信をもっていますが、モデルの普遍性と普及しやすさと持続性は別の問題だとも考えています。みんなの学校モデルの大きな強みは、モデル普及に費用と手間と時間がかからず、しかも効果が持続するという点です。典型的なのが最初のミニマムパッケージ（学校運営委員会活性化モデル）です。研修は短期間で一回だけ、研修対象者も限られています。一番持続的にお金のかかるモニタリング支援も、学校運営委員会連合によって、行政官のモニタリング負担を軽減してあります。成果は、いまだ住民は学校運営に関し参加動員を続け、その額は、投入額をはるかに超えています。これだけ費用対効果が高く、持続的なモデルは学校運営改善の分野では他にありません。

今回紹介した上記の点で質のミニマムパッケージを評価すると、他のモデルに比べの普及しやすさと持続性ともに、最初のミニマムパッケージより明らかに劣っています。それは、質のミニマムパッケージが、効果を出すためには算数ドリルというツールが必要だからです。住民がこれを購買しつづけるのには負担が大きすぎます。では政府が買ったらどうか。教科書も十分に配布できていない政府がこの副教材を購入にプライオリティを置く可能性は限りなく低いです。

では、このモデルは、普及もできず、持続性もないのか。答えは否です。上記の成果で見るような成果を生徒一人当たり1000円の投入で実現できるモデルです。教育開発に有効なモデルやツールに投資したいと考えている教育系のファンドは多くあり、このモデルの付加価値を高めれば、はその資金を獲得できる可能性はあると考えています。

付加価値とはなにか。それは、もうひとつの大きな教育の基本的能力、つまり識字に関する取り組みをパッケージの中に導入することです。現場の基礎教育改善ニーズは、読み書きそろば

んで、そろばんよりむしろ読み書きと言っていいと思います。読み書きそろばんを同時に改善して始めて、ニジェールの生徒たちは、生きる上で最低限の能力を身に着けたこととなります。そして、開発ファンドにとっても魅力的なパッケージとなるのです。みんなの学校プロジェクトは、将来的に質のミニマムパッケージの改善を行い、普及することを目指すべきだと思います。

チーフアドバイザー 原